



菊世操集
三

1638
3



門 13
番 1638
卷 3

出兵

當世操車卷之三

浮橋頼母妻女之事

仲尼南子又身有子絡毒比比柳下惠如成宿以人更之
疑之代善史疑之及之及之及之及之及之及之及之及之
ありて大疑する原きを及之及之及之及之及之及之及之及之
もより一とあやほ戸出府日左ル大家の西家の中子浮
橋頼母之云人有同役信信信丹之節と云人休言より
此意以て及之及之及之及之及之及之及之及之及之及之
親しきりり信分又丹之節ハ妻有レケ不修也
先達て及之及之及之及之及之及之及之及之及之及之



初とて又子に悴き人より或は丹を以て月事有
て有りしは於母をさかまひて安まらざるを
得て夜更に於母をさかまひて安まらざるを
さかまひて雷をさかまひて安まらざるを
さかまひていりも安まらざるをさかまひて
安まらざるをさかまひて安まらざるを
母初に於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを

初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを
初は是より於母をさかまひて安まらざるを

葉の裏

〇

了ていつるに不興歎丹之直も丹之直傳るものいふ
婦ひあれたとて先は有まどと事あり女房も女房
人の押入へ遠入る隙とぬと云へあまの女房もわ
文ふ用け祓をあ人の事此ぎくさ清も合はれ候事
たぐくありて丹之言成程を後の心疑ひを極すも
ろくぬ事せられた此まゝ不義老と有ておまうけ
られても是程ありと云ふがごとくあまの心慮もさ
心慮の事おろしあゆもたて自其成みまほし月
の安く付合ふもあれもほろぬかたの事
と云ふぬ事實にあまの疑ひとけあややあま

心慮りくはるなり佛神も照深あることよ
心慮と心慮と忘れやと必く疑ひあり候事
とて扱自分用白二ありゆてその日の別をて取
りて居候れど窓とせなりおれ今迄親母と云ふ
れどく安く増しと云ふ事の難おまこり候
しげかきそとをさうらば証候とまらんそは不通
らるもせなれどおろしひらけ建事なげりや
今までの事いとおろしお入すべしと云ふいづれ
たきおあめこれ親母と云ふひり晴らんことを
おけ行くてたの事いよ換移すれど親母の心

栗重二

一

ら奥園より乃んてまゐりける風情あり或は石
と指ひしは時丹之に於て此方いあらぬ
して此方も亦も迷惑致さる丈なり以て此母
復んとけり此方おんていふ亦丹之に中人といふは
浮疑をんとの意をこし押してあるなり云を
こそ急て成程おれり今又遠ざりあり底持
と保不義より入人唯之の操扱いぬ所ありた
ちての母よりふさささういづれに
るものすしと云を丹之にも打り分れば亦亦
もたの趣ありさてやうにおれり出入りして

希りも後形母をくくんと付て見られた文よ不義が
ましき祈之の秘を授る解て又との名も此更
とありぬ終りよも年あり七月下旬なりとありわおる
ち成り丹之の事かきたる母を授るに内の老
るまで漸しきよ能く亦もいへり扱ひ終りて
人坐敷に寐情し一たり候し候しよおれり
小して扱ひよいもき目あり汗とあり候し
も湯とあり候し候しと云も丹之御いふも
く汗あり候し候し候しと云も丹之御いふも
よ事れに形母付て大方候し候し候し

標車



標車



もくくもく一して流ねやつい初てまるなり 流ねい
夜ふ並をとりふらさるる格子袴のゆきと取で惟子
次人きき一がさしくさけくはれより書が居ね
をも並とあとも西例ありを度つ惟子とよりるぞ
その安さま丹之節がうさぐつだひけいそくくお
新りり初まて丹之節と書ひは流波ゆきと書一
南流流るる衆より夕ゆきとくはすま本流とて書
く之暇りふがごもさきくそ敷よろろくお母が性
子と首さまのい前後も知流入るる女居お
一ゆして二て流下せ流とるせと書い自分の流衣

概乃大機女よこほき松と深方流るるお流る
多りくささるるう流衆お是い流くおよりさ
つこの丹之節とい愛もあ流例は流て飛流
が流衆おおびくお流いなりぬと標一て
大流ら流敷流と標お丹之節よりあけそもあ流
中へ遠入て因く一入志るるい知ぬとくはさら
がし一交り流二交の流那とくは北書き事
なりお流流るるが一あよ標流流下男七流と流
て流びよ流ら流が書りて下書とるてから
いお流ら流るるあ流(流り流ら流は流流る

マアかゝらぬおぢららさうは癖でほやくと大分
紙して云ん下女も紗刈と拵ながら肝とに
をある時よ美人目さめて魚と海見合何と云
河もろくそ信書表の切ううり遊よ文房一
かりひりらぬ事おさん所多末が男のともくや
と笑ひさるいさう一さうのり彼を云うは
て大よいりさるう遊多代けぬもたうんや
衆も志れにそふも拵重れ福と羽立物お
を更まで心祈返と彩ひお一武土屋の立
此帳中信書表献封よお出封とせらば又

市井公とも仕方より番細と飛い出れば
重けを中屋へ云と勢一不費明派及そ
言類同家の方と討とそ何の事柄
武土屋の立とぬい戦場り別腹
と迷ひさるう一丈夫交代せぬ
重けを中屋へ云と勢一不費明派及そ
言類同家の方と討とそ何の事柄
武土屋の立とぬい戦場り別腹
と迷ひさるう一丈夫交代せぬ
重けを中屋へ云と勢一不費明派及そ
言類同家の方と討とそ何の事柄
武土屋の立とぬい戦場り別腹
と迷ひさるう一丈夫交代せぬ

栗原

温泉坊 之の下又親敷あり有る所を使はりおむんと
ど諸念せしむらればこそ武士たのま罪一と大小
状も二方と責代が一是と諸用可し二又の下へ
立哉（親敷の世帯）小信を成りし百歳と云ふ
子利成し平人とせりてさふみ多世に於て貴いお
い徳おつとせし洗くは立哉又礼信丹之に於
よりお石が計りまきりうてゆくととるこそ一
りり或時丹之におぬよは誠し世帯と云ふおふ
事とてくお果しりまきし是も先生乃約束りよ
てある所しといおひおれも無益なりと云ふやと

もくくおる事おれいつのゆふと又と云
ふおまふも又お男と二世の女房とありお
云ふおいしめていやたお教とありおひも
災難とてくお果しれたお女お不義の女
能なるももあつたお女お母といふお女
此世で雲い隠れたお女お急をたらしと云
お女おる今又お女と云ふお女お世の事お
つたお女お一はしお女おも通るお女
お女お世とお女お女お女お女お女
人味お女お女お女お女お女お女

温泉坊

計備いぬりたりしに願しといふ中を也西男のたろ
た身いいつを也の初と遠て道次第練なりを西男の
男がうもゆらんまも和らぐよ女のぬくゆそまふも
ゆそ本更うりも増ておりぞそれい一匹うろとを
とより一交於母と之れ更と持しといわれはき
是を死これゆりた是男と母も屋と此なり
ゆしとや世上有更此とをといれ母が願はる
念の男と加修ふたよりい又蒙ひ代贈りして
たぬいといふ中路更も福代持屋種を捨てた
舟抱致んとはるなりとて及程と正し割膝うけて

急交を丹之良も船入て扱ゆく西男の初成貞女を
度も天竺うも又と有まのそをとい渡り入なりた
社乃ん願てこりて那と逢とい世上の神も此を
を是代り人た菅家の遠流もあまのこころい
かりまねんさんふく感て更うりいそまふれも
云流素白の更娘が抱えんて扱いはよ暖る向て乃
おゆりそ麻陸分才うく及て三四年おるしち
一足のおらもせざりしとや扱又いそ素白の本村之太
更娘おのこ先をて結一結して有る所が更と死これ
しと親元一ゆり所は所が親母今いそ素白がれい草花

東山

二

こころい 早く波おろす代新母方 後書ふせーたり
 こころ後之ち更おろすて交の下 海流をさけ
 海が之を更伝うる 庄波の 戸紙一を隣い 是も傳之
 又て友人を二とすも 友より 友より 丹之部
 今いふまみ 海流勢の 流八之きて 口合く 湯のた
 九よの 勢を かねて 高も 能く 仕も する 志の あり
 かねて あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 此も 傳人 あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 と 扱て する あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 一 あり あり あり あり あり あり あり あり あり

こが切も こそ あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 女房は 扱する あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 男は して それ あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 る 海流 あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 と 云ふ あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 海流 あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 扱 あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 の 妻 あり あり あり あり あり あり あり あり あり
 此 あり あり あり あり あり あり あり あり あり

因果入り波女いふ事なきは世の事にて分れく
此方違二女の足跡ゆへに欠落被り候て是
も新氣をてつる者の上其事一生垢に被り候て
之を益なり毒喰を四代被り候ればと云ふ事
もなれり一と申す事いふに候て候て候て候て
のたつと云ふ此詞は恥入て又あり候事とも申
と始候つごころは世を女人の君侍もいと申
孫の女女たり候て候入ぬ之を又の禰一と云
て候細く言はれ候事一あれは初て候の不義
ある事候事候と云ふ候事候の貞を女と感ん

一と云ふは女神を被り候に候は候は候は候は
なりても丹之にまがひる事候は候は候は候は
三男の御治候て候事候は候は候は候は候は
お尋事候り候候候被り候事候は候は候は候は
を候候候候候候候候候候候候候候候候候
き候候候候候候候候候候候候候候候候候
樹と云ふ事候候候候候候候候候候候候候
まぬ候事候候候候候候候候候候候候候候
も候候候候候候候候候候候候候候候候候
湯に候候候候候候候候候候候候候候候候

皆て多分粉と調へ二反も三反も買ての上扱お是れ
八分程もいちと仕立交物省が計の功者女才と並
り程み毎一と方通付よ是れをきやと云んは元は
て為程功者女者も在り別私方よお在るは女中
なりおまよ入りぬりぬせぬお扱改買よなるも一
と云んは又い奇なり一とて別花ハ方一別新おるよまじ
を付よなり仕立物と程してそれとおと一と女も
りてん安くなりて扱お是れ程もい師治よまじ
て之費おるはりぬが女乃と云れはおまもくをい
淋しきなりぬ勇い程物も功者なれば何れをせざる

も何りまじ程交程物もあり遠慮才に安くは
後宅も有り程又此方にも余るなり一とてまより
お解て程も程一とまよ並るくぬするよまて或
時何となく同方ぬぬ勇いえよりぬるよとぞらぬ人
もも是之はと云んは後と又女の扱て又まの扱扱を
せぬいと程程なく他人向なりをとい合衆ゆい
るいよ程てい化云す程りぬはぬま程りぬ人
おい一と云んは後たのぬもをぬりぬはぬと云んは
丈ぬよいぬ程りぬるもあづるぬいぬ人
若れ妻なり一とら子細りぬてくぬ程りぬ

和歌集

一

是も前生の約束とて是れがく明く先て所を
ありと云われはお世をまごしおんご驚きあがりしとて扱上
花八重と文姫をいぢきや及程でしんごん社合受納
ぬ接招なりしとありはる人より利
つる書と何ぐりて頼まれをゆゑに答に
人なり此方納めは結構を男と名ありなり
が兄弟分がしとせし中一は男がおんごおんごとい
計と云あれ方れは全よ今を十がう調ひ中一
りといも末頼のしと兄弟とりのしることもれは
斗嬌しと必くうといよまうせ給くと云われいお

いしと頼それい希程なりと云ふとるいふ頼ていしと
男持おぬとぢくい為男と持不どありは今れ花八重
と文姫もぬとありそ花八重とるいふるおんご遠か
く不義乃罪と為て今世種まぬりされど文姫
く云ふりて女文と成りてましとや介とてい波しと
いれつる文は私風情の使まよなき男と由を信ふと云ん
とのお志いも方希嬌しと云は妹背乃事い今し
ありあれがうけお世に下と云ふと云ふれをお見
たあふ先の文いよごし世よ若くは細し死命
つそれをい知りよやと云れはおるされと云れて

不孝言^{おしご}徒を^{おしご}夢^{おしご}祓^{おしご}を^{おしご}生死の^{おしご}報^{おしご}を^{おしご}た^{おしご}ん^{おしご}て^{おしご}死^{おしご}
 り^{おしご}の^{おしご}是^{おしご}男^{おしご}ま^{おしご}ま^{おしご}り^{おしご}申^{おしご}は^{おしご}い^{おしご}ら^{おしご}ん^{おしご}が^{おしご}い^{おしご}を^{おしご}
 お^{おしご}岩^{おしご}又^{おしご}此^{おしご}男^{おしご}が^{おしご}先^{おしご}の^{おしご}丈^{おしご}の^{おしご}浮^{おしご}棺^{おしご}形^{おしご}母^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}
 大^{おしご}は^{おしご}聲^{おしご}を^{おしご}る^{おしご}祈^{おしご}を^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}し^{おしご}て^{おしご}知^{おしご}り^{おしご}し^{おしご}て^{おしご}あ^{おしご}ら^{おしご}せ^{おしご}り^{おしご}細^{おしご}は^{おしご}
 る^{おしご}い^{おしご}知^{おしご}る^{おしご}人^{おしご}あり^{おしご}此^{おしご}人^{おしご}は^{おしご}今^{おしご}後^{おしご}書^{おしご}成^{おしご}束^{おしご}之^{おしご}て^{おしご}此^{おしご}男^{おしご}は^{おしご}傳^{おしご}
 て^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}く^{おしご}む^{おしご}つ^{おしご}ま^{おしご}い^{おしご}か^{おしご}ら^{おしご}の^{おしご}後^{おしご}は^{おしご}た^{おしご}ら^{おしご}ま^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}此^{おしご}
 報^{おしご}義^{おしご}理^{おしご}を^{おしご}と^{おしご}ま^{おしご}ひ^{おしご}て^{おしご}も^{おしご}至^{おしご}益^{おしご}あり^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}左^{おしご}右^{おしご}
 屋^{おしご}を^{おしご}と^{おしご}り^{おしご}ま^{おしご}ら^{おしご}い^{おしご}が^{おしご}事^{おしご}を^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}し^{おしご}物^{おしご}を^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}し^{おしご}
 屋^{おしご}に^{おしご}然^{おしご}し^{おしご}は^{おしご}づ^{おしご}れ^{おしご}を^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}し^{おしご}い^{おしご}せ^{おしご}めて^{おしご}た^{おしご}す^{おしご}ま^{おしご}ら^{おしご}
 が^{おしご}く^{おしご}し^{おしご}て^{おしご}強^{おしご}も^{おしご}あ^{おしご}ら^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}た^{おしご}れ^{おしご}あ^{おしご}ら^{おしご}も^{おしご}あ^{おしご}ら^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}し^{おしご}て^{おしご}

る^{おしご}が^{おしご}ら^{おしご}嬌^{おしご}の^{おしご}あり^{おしご}唯^{おしご}も^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}此^{おしご}後^{おしご}埋^{おしご}れ^{おしご}死^{おしご}を^{おしご}未^{おしご}來^{おしご}に^{おしご}
 て^{おしご}云^{おしご}汝^{おしご}と^{おしご}執^{おしご}人^{おしご}と^{おしご}あり^{おしご}外^{おしご}に^{おしご}あ^{おしご}ら^{おしご}ぬ^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}お^{おしご}岩^{おしご}は^{おしご}母^{おしご}
 う^{おしご}初^{おしご}て^{おしご}何^{おしご}代^{おしご}頂^{おしご}き^{おしご}し^{おしご}み^{おしご}ば^{おしご}ら^{おしご}私^{おしご}形^{おしご}母^{おしご}の^{おしご}後^{おしご}妻^{おしご}あり^{おしご}此^{おしご}男^{おしご}
 が^{おしご}不^{おしご}義^{おしご}なり^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}途^{おしご}て^{おしご}情^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}此^{おしご}男^{おしご}は^{おしご}
 上^{おしご}の^{おしご}男^{おしご}が^{おしご}此^{おしご}人^{おしご}の^{おしご}世^{おしご}界^{おしご}は^{おしご}又^{おしご}と^{おしご}有^{おしご}ま^{おしご}ら^{おしご}怒^{おしご}も^{おしご}自^{おしご}ら^{おしご}
 又^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}此^{おしご}男^{おしご}は^{おしご}ま^{おしご}ら^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}
 之^{おしご}を^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}
 形^{おしご}母^{おしご}の^{おしご}言^{おしご}へ^{おしご}申^{おしご}り^{おしご}て^{おしご}何^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}
 も^{おしご}あ^{おしご}ら^{おしご}ぬ^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}
 是^{おしご}を^{おしご}形^{おしご}母^{おしご}の^{おしご}言^{おしご}へ^{おしご}申^{おしご}り^{おしご}て^{おしご}何^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}と^{おしご}い^{おしご}は^{おしご}る^{おしご}



梅
車
云

合身大志のぬもを有り 別のこともあつてはるい海を
これし先書おのぬもを有り 父母の教えんが有りまをば親
母の介親多代之を方い言なり 妻よぬら今すも
同じをすば討て控人となり小畜生免と行へし言ふ
妻よする身をたぬも有りぬ事ありと云剛をたて
いおひし愛金く不義なる中親之を又之の下
よて言おし 悔れまといへば 一よては友之夫を
探り 元ぬ又まいも言が知ぬまごとく 湯治り
ありし身を余はふごし 由付しぬてぞんくとも親
ひは承之受よぬもを有りぬて之を又が言する母言

がひに子親くまの恵よお石どの同善野か
一親くと思ふせしとた妻く云せし親の念
成人の世界より有りた有なるはかしく女も
も成るまき人なり 是城を妻おし不義の怨念を
付て言んるをそとしく 悔み 親の志を死
親の志の達てすめ 終ふ有言方へ再結志され死
これ誓し 先の事の事い忘る 隙か 一はあれ
を内男と大切ありしといふと 言とそ付ハ二は有
又お石及ハ一違はぬ力の事斗ありて此ま 朽
果るた是男は海へくすし一命なりひこられぬ

栗重三

ふんばれぬものなりよきなりともいふ所ありしは
石の紋も通し一たすめが能く書かへり一さもくくも
是れよくいふといふ所ありしは
源氏別記之を又方まで傳ひたりしを
頼母も初めてお石が不変なるを
乃一篇の實有所とゆて今又不便
ど何れ頼母が書かへりしは
文部にお石がふんばれぬも又
てうぢくいふは
際より髪押切てまは是れ
際より髪押切てまは是れ

ハ高介のふんばれぬも又方まで傳ひたりしを
源氏別記之を又方まで傳ひたりしを
乃一篇の實有所とゆて今又不便
ど何れ頼母が書かへりしは
文部にお石がふんばれぬも又
てうぢくいふは
際より髪押切てまは是れ
際より髪押切てまは是れ

梁車

ち更けり新く殿（中）と申れは此れ分れ此感て先
 お石（い）の感（い）の切（い）か—お石（い）の感（い）の切（い）か—
 もをさるに世界（い）れ女（い）の鏡（い）まとの貞女（い）の女（い）
 云い是感（い）の切（い）か—と云（い）の感（い）の切（い）か—
 三（い）の感（い）の切（い）か—と云（い）の感（い）の切（い）か—
 まる感（い）の切（い）か—と云（い）の感（い）の切（い）か—
 女（い）の感（い）の切（い）か—と云（い）の感（い）の切（い）か—

南世操車 卷之三終

是れ
 是れ

